

(31) サツマイモ(カンショ)

主要病害虫別防除方法

農薬による防除については、栽培ステージ、病害虫の発生状況等に応じて、散布、灌注、土壌消毒などを行う。
なお、農薬による防除の際は、農薬登録内容や使用上の注意等を遵守して実施する。

(農林水産省農薬登録情報提供システム <https://pesticide.maff.go.jp/>)

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
黒斑病 (<i>Ceratocystis</i>)	①種いもや苗を温湯に浸す。 温度 浸漬時間 種いも 47～48℃ 40分 苗 47～48℃ 15分 ②本病に強い品種を栽培する。 強：農林1号 ③無病の種いもを用い、苗床の土は無病地の新土を使用する。 ④つるの切取りはできるだけ高切りとし、土壌に近いつるは避ける。 ⑤収穫時に選別を行い、罹病いもは貯蔵しない。 ⑥本貯蔵前にキュアリング処理を行う。温度33℃前後、湿度90～95%で約4日間保つ。 ⑦マメ科以外の作物で輪作をする。 【参考事項】 苗は束ねて基部を温湯に浸す。 抵抗性弱：ベニアズマ 品種間差異は、ハリガネムシの嗜好性と関係が深いといわれている。 保菌種いも及び土壌中に残存した被害いも、被害茎などが伝染源となる。 消毒前に貯蔵穴の土を薄く削り取る。 ハリガネムシ、コガネムシ類の幼虫や野ネズミの食痕から感染し、発病することが多い。
黒あざ病 (<i>Monilochaetes</i>)	①種いもや苗を温湯に浸す。 温度 浸漬時間 種いも 47～48℃ 40分 苗 47～48℃ 15分 ②無病の種いもを用いる。 ③排水良好な畑を選び、高畝とする。 ④アルカリ性肥料を過用しない。 【参考事項】 排水不良地や、土壌がアルカリ性のとき発生しやすい。 伝染源は種いもが主である。
つる割病 (<i>Fusarium</i>)	①種いもや苗を温湯に浸す。 温度 浸漬時間 種いも 47～48℃ 40分 苗 47～48℃ 15分 ②無病の種いもを用いる。 ③土壌湿度に注意し、活着を良くする。 ④他の作物との輪作を行う。 【参考事項】 抵抗性弱：ベニコマチ 保菌種いもを通じて苗伝染する。
基腐病 (<i>Diaporthe destruens</i>)	①発病ほ場から種いもを採取せず、無病の種いもを用いる。 ②排水良好な畑を選び、高畝とする。 ③苗は、地際から5cm以上離れた位置から採取し、ハサミはこまめに消毒する。 ④病気が発生したほ場は、輪作をするか作付けをしない。 ⑤収穫後は、速やかに残渣をすき込み、発病株等はほ場外に持ち出し適切に処分する。 【参考事項】 排水不良の場所で発生が多くなるため、額縁明きよ等で排水をよくする。 土壌消毒を行う際は、残渣の中までは殺菌できないため、残渣は細かくすき込み分解を促す。
コガネムシ類	①必要以上に有機物を施用しない。 ②マルチ栽培を行う。 【参考事項】 アカビロウドコガネ、ヒメコガネ、ドウガネブイブイ、アオドウガネなどの幼虫が、いもを食害する。
イモキバガ (イモコガ)	【参考事項】 苗床末期と夏から秋にかけて発生が多い。 幼虫は葉の裏面を内側に巻くか、隣接葉をつづり合わせこの中に潜み、葉を食害する。
エビガラスズメ	【参考事項】 幼虫が夜間に葉を食害する。 8月の発生が多い。 摂食量はナカジロシタバの約8倍である。
ナカジロシタバ	【参考事項】 幼虫が葉を食害する。 苗床期と9月の発生が多い。
ハスモンヨトウ	【参考事項】 被害は、春から夏は比較的少なく、9月以降に多くなる。ナカジロシタバと混発する場合が多い。
センチュウ類	①常発地では、連作を避け抵抗性品種を選んで栽培する。